

令和6年度（2024年度）島根県立大学
国際関係学部 国際関係学科
国際関係コース

一般選抜（前期日程）

小論文

【解答時間 90分】

以下の1から8をよく読んでその指示に従うようにしてください。
指示に従わない場合は、不正行為と見なしますので、注意してください。

1. 解答開始の合図があるまで、この問題冊子を開かないでください。許可なく問題冊子を開いた場合は、不正行為と見なします。
2. 解答時間は90分です。
3. 試験問題は、1ページから3ページです。解答開始の合図があった後、問題冊子を確認し、印刷不鮮明な箇所等があった場合は、直ちに申し出てください。
4. 解答用紙は2枚あり、問題冊子とは別になっています。解答は指定された解答用紙の解答欄に横書きで記入してください。
5. 受験番号、氏名は2枚の解答用紙の所定欄すべてに記入してください。
6. 問題冊子の余白を下書きに利用しても構いません。
7. 試験時間中の退出はできません。
8. 試験終了後、問題冊子は持ち帰ってください。

問題 次の文章を読んで、後の問いに解答しなさい。

●民族差別って人種差別となにが違うの？

日本社会にはさまざまなマイノリティの人々が住んでいます。そして、そうした人々に対する差別に関しては国際社会から是正勧告がたびたび行われています。一方で、こうした差別の問題に対して、みなさんは、こんな発言を聞いたことはありませんか。

「日本に存在するのは、人種差別ではなく、民族差別だ」

たしかに、メディアなどでも、アメリカの黒人差別の問題などは「人種差別」として報じられますが、日本における在日コリアンなど旧植民地の人々やアイヌ民族への差別は「民族差別」として報じられることが多いのです。しかし、日本が「人種」という概念をどのように受容してきたのか、その過程を見ると日本において「民族差別」と呼ばれているものが「人種差別」の一種であることがわかります。「人種」ではなく「民族」という言葉が用いられているのは、単なる言葉の違いに見えるかもしれませんが、しかし、実は「民族」という言葉の背景にこそ、日本人の人種に対する複雑な立場が表れています。

日本に「人種」という概念が本格的に浸透していったのはいつ頃だったのでしょうか。それは今から150年以上前の幕末から明治時代にかけてだと言われています。「文明開化」という言葉もあるように、明治になると、日本に欧米諸国の文化や学問が急速に流入し、それまでの制度や慣習があらためられ、近代的な国家建設が開始されました。そして、このときに日本が欧米諸国から受容した思想のなかに「人種」がありました。人種という概念が生み出された過程について（略）、その理論の中心には、「人間を分類し、序列化する」という考え方があります。人種には、欧米諸国が有色人種に対する支配を正当化するために発展してきたという背景があるため、そこでは、白人が有色人種よりも優れたものとされます。日本が近代的な国家建設を開始したのは、まさに、こうした人種観に支えられた欧米諸国による植民地支配が世界中を覆っていた時代でした。

では、日本は具体的にどのように「人種差別」の当事者となっていったのでしょうか。近代日本が掲げたスローガンのひとつに「脱亜入欧」というものがありました。このスローガンのもと、日本は欧米諸国に倣い、周辺地域に対する領土拡張政策を推進していきました。その過程で、日本が支配していったのが琉球、アイヌ民族、台湾、朝鮮でした。人種が欧米諸国による有色人種の支配を正当化してきたのと同様に、日本による支配もまた人種によって支えられました。例えば、アイヌ民族の地域を支配する過程において、アイヌ民族の人々は「怠惰」で「病気になりやすい」といった気質、特性を持った劣等人種であるとの言説が広まりました。これは、まさに先ほど説明した「人間を分類し、序列化する」といった人種主義の典型であり、日本による支配政策が人種差別の一例であることがわかります。そ

して、法的にも日本の支配政策は欧米諸国に倣ったものでした。例えば、日本がアイヌ支配のために施行した「北海道旧土人保護法」はアメリカのドーズ法と呼ばれる先住民政策の過程で施行された法律を参考にしたものでした。日本のアイヌ政策とアメリカの先住民政策につながりがあるとは、知らなかったと言う方も多いかもしれませんが、こうした事実を考えると、(A) 日本が欧米諸国における人種差別と無関係ではなかったことがわかります(略)。

また、日本がこうした支配政策を推進していたのと同時期に、日本国内において重要な事件が起きました。それが「人類館事件」です。事件は1903年に大阪で開催された第5回内国勧業博覧会における「人類館」という展示をめぐったものでした。この展示では、「異人種」としてアイヌ、琉球、台湾などさまざまな地域の人々が、まるで動物園で展示される動物のように衆目にさらされました。実は、こうした人間を万国博覧会などで展示するという行為は、19世紀、20世紀の欧米諸国において、「人種」という概念を人々に広めるために機能していたものでした(略)。欧米諸国に倣い周辺地域に対する支配を拡大していた日本も、欧米諸国と同様に「異人種」とされた人々を展示し、人種の存在を社会に広めていきました。

このように、日本における支配・差別は欧米諸国と同じように人種によって支えられたものであることがわかりました。では、(B)なぜ日本においては、「人種」ではなく、「民族」という言葉が用いられるようになったのでしょうか。実は、この民族という言葉には人種をめぐる日本の複雑な立場が表れています。人種が、欧米諸国の支配を正当化するために構築されてきたことは先ほど見たとおりですが、そこでは日本人も有色人種であり、欧米諸国から支配・差別の対象となります。さらに、日本が領土拡張政策を推進していくに従って、欧米諸国の間では、日本に対する危機感と「人種」が結びつき、「黄禍論」という言説が広まることになりました。「黄禍論」とは、日本人などの「悪しき黄色人種」が世界に禍わざわいをもたらすという言説です。こうした背景のもと、20世紀初頭には、アメリカを中心に日本人に対する排斥運動などの人種差別が横行しました。そのため、日本にとっては、人種という概念は自らの支配を正当化するものであると同時に、欧米諸国から劣等人種としての自分たちに向けられる差別を正当化するものでもありました。こうした人種をめぐる複雑な立場によって、日本では「人種」に替わって「民族」という言葉が支配的になりました。

最後に、当時の日本人は自分たちが抱える差別についてどのように捉えていたのでしょうか。実は、当時の日本人は人種差別とは欧米諸国の抱える問題であり、自分たちの差別は人種差別ではないと考えていました。それを表す事例として、日本による人種差別撤廃案提案というものがあります。1914年から1918年にかけて行われた第一次世界大戦が終結すると、国際連盟設立に向けた各国の交渉が始まりました。そのなかで、日本は「人種差別撤廃」を国際連盟規約に明記することを提案しました。この提案は、国際社会に訴えかけたものとして評価できますが、一方で日本が自国の差別については人種差別と捉えていなかったということを示してもいます。日本の差別が人種差別であることはこれまで見てきた通りです。日本が人種差別撤廃を国際社会に提案したのと同時期に、朝鮮半島では三・一独立運動が起きました。この運動は日本からの朝鮮独立を目指して行われたものでしたが、運動

は日本の朝鮮総督府によって弾圧され、多くの死傷者を出すこととなりました。この提案は国際社会に訴えかけたものとして評価できますが、自らの支配地域に対しては苛烈な弾圧をしていたという二面性を考えると、日本の人種差別撤廃案が、日本人が自らの抱える人種差別に対しては向き合えていなかったことを示していると言えるでしょう。

このように、日本において「民族差別」と呼ばれてきたものが、歴史的にも「人種差別」であるということがわかりました。そして、「民族」という言葉を用い、自分たちの社会に存在する「人種差別」に対して向き合うことができなかつた日本人の姿は現在にまで受け継がれています。(C)日本における差別を「人種差別」と捉えることによって、他国における差別が日本社会につながる問題であることが見えてきます。

出典 監修者：貴堂嘉之、著者：一橋大学社会学部貴堂ゼミ生&院ゼミ有志『大学生がレイシズムに向き合って考えてみた』明石書店、2023年、14～17ページ。

なお、出題に当たっては文章の一部と見出し、注を省略した。

- 問1 下線部 (A) に関して、日本が欧米諸国における人種差別と無関係ではなかつた、とはどのような意味か。文章中の表現を用いて 100 字以内で説明しなさい。
- 問2 下線部 (B) に関して、なぜ日本においては、「人種」ではなく、「民族」という言葉が用いられるようになったのか。その内容を問題の文章全体を踏まえて、150 字以内で説明しなさい (なお、文章中の表現を用いても構わない)。
- 問3 下線部 (C) に関して、「日本における差別を「人種差別」と捉えることによって、他国における差別が日本社会につながる問題であることが見えてきます。」という筆者の見解について、あなたはどうか考えるか。文章中からこれらが指し示す意味を簡単にまとめ、これまでに学校で学んだことや普段の生活の中からの気づきも参考にしながら、800 字以内でできるだけ具体的に論じなさい。

(以下余白)